

The Gallery voice

NO-55

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX (098) 888-6117 / 2013.11.16
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

只今、あぶり中

紺野乃美子

Talking F. Mをボケーときいている。

福山雅治ってすごい。

ステキな歌をつくれれば、龍馬にもなり、父にもなる。そしてラジオではとにかくおもしろ人間。今は愛人って世の中にそんなにたくさんいるのかな？って話をしています。下世話だ。孤高の女のコーナーもおもしろい。

近頃フットサルがおもしろい。ナカナカ上手にならないし、シュートってやつは決まらないけどしょーがない。練習しなきゃ。まずルールを覚えてね、って言われたっけ。

ハーリーも楽しい。今年は特に燃えた!!!祝・三連覇☆で学びも多かったのです。10人もいないとできないところがいい。とてもいい。

屋我地バドだって楽しいんだ。クーニーさんのスーパープレイを見たいのです。時間があれば雨マケバレーにだって行きたいんです。ZUMBAはものすごく自粛しております。ってなにが言いたいかと申しますと、今まで関わることのなかった業種の方々と交流をもつことができ位置をみるのです。

自分の中ではいたって当たり前のこと、すごくびっくりする人がいるのです。それにびっくりするのです。そしてそうかもね、と納得するのです。世の中の焼き物の位置とは…まーどーでもいんです。なんら社会貢献なぞもしていませんし、そりゃそうです。なぜにこんなことをしているんでしょうか、やーとても大変なんですけど…。つい先達である陶芸家の娘さんにお会いしました。23歳というから大学を卒業したばかりでしょうか。父親は荒焼作家です。ショートカットでスポーツウェアを着た彼女はとても23歳には見えないくらいおぼこく、純粋に華奢にみえました。この彼女が父親の後を継ぐのでしょうか、帰りの車中でかわいそうだなあと。つくづく。彼女自身ももうとらえられたのでしょうか、ちょうど23歳になったばかりの頃、窯づくりがはじまった。それから7年が経過。得たものは多く、なくしたものも多い。

何度も何度もころんだ。立ち上がれず、地面を這ってしか進まない匍匐前進の日々だった。とにかく視野も狭かった。それでも進むしかなかった。アタマで考えてもつ

かめない。ある時ものすごい疲労感におそわれた。とにかく疲れた。迷いが出はじめ、前が見えなくなりはじめた。いったん歩をとめた。疲れは色へと向かわせた。回転の早さ、すぐに見える結果。いくらでも試しができた。でもものからキモチが離れるのも早かった。心底疲れ果てることはなさそうだし、心底がっかりすることもなさそう。ココロゆさぶる感動もなさそう。ということでもとい。結局もとにもどってくるしかなさそうです。膨大な作業とで成り立ち、一筋縄ではいかないのだけど、見たいものがあるのです。



「タルガヨー」

2013年

考えるだけで辟易。こんな大変なことやりたくないちゃやりたくない。なぜやってるのかと問われれば呪縛としか答えられない。とらえられてしまったのです。こうでもしなきゃではこない。そうはしても簡単にはお目見えしない。会うのは至難の業。ナゾだらけ。なぜ雨が降ればこんなことになるのか…、とにかくも自然をしる。自然とともに。大自然と仲良くなって味方になってもらうのです。チカラをかしてもらおうのです。塩と米・酒と水をうさげまして、ヒヌカンさま。うまらしみそーれ。ウートートー。

(こんの のぶこ／陶作家)

「ともにある存在」

木村容二郎

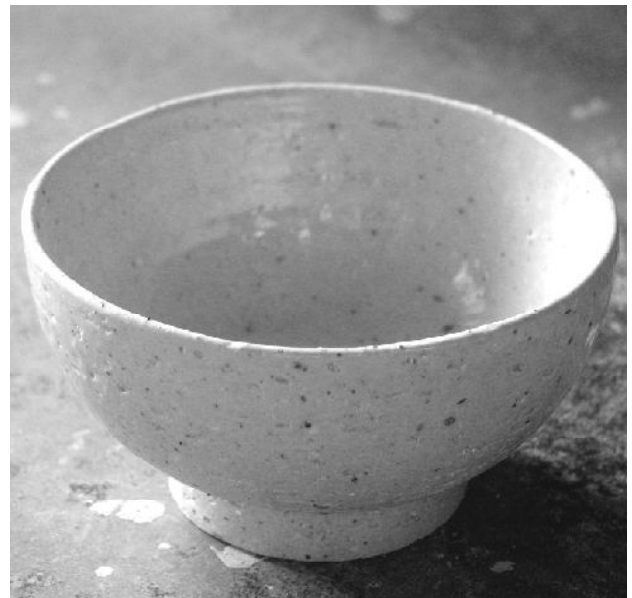
11年前、大学入学の為に沖縄に来た。荷物の運び込みを終え、時間を持て余したわたしは、ふと大学まで行ってみようと思い立ち、新しい部屋を出て歩きだした。日が少し傾き始めた頃だったと思う。初めての一人暮らしで目に見える物は皆新鮮で、ワクワクしながら、新しい街首里をぶらぶら歩いていると、今ほどではなかったが、観光客であふれかえる首里城に差し掛かった。坂を上った辺りにちょっとした人だかりが出来ており、横目でそっとのぞいてみると、岩でできた門戸のようなところに女性が三人座り込んでいた。ああ、これが御嶽というものか。本や博物館でしか知らなかったたものを実際に目の当たりにし、ひどく感動したのを覚えている。ゴザの上で不思議な言葉を話す女性。一定の距離を取り、記念撮影している観光客たち。全体を覆う西日。湿気。一見シュールだが、これがわたしの沖縄に来て初めて目にした祈りの現場だった。

今回の展示をするにあたり、われわれの世代とは何かという事を何度か話し合った。色々な考察が出たが、以前民俗学の授業の時に同級生と、自分たちは「宗教アレルギー」だよ、と話していたのを思い出した。小学生の頃にオウム真理教の一連の事件があり、高校のころに9.11が起こりムスリムとキリスト教徒との報復合戦が激化し、信仰で人が人を殺し合う世界を目の当たりにした。その結果、宗教とは危ないもので、語る事すらタブーな雰囲気がある、と。宗教という言葉自体、小学生の間ではひとつの侮蔑の言葉になってすらいたと記憶している。以前から無宗教化は進んでいたのだろうが、あれらの事件によって決定的に「信じること」を失ったのではないだろうか。だからこそ、先の沖縄における祈りの現場との初めての遭遇は、ショッキングであり、強烈な印象として刻み込まれている。

わたし自身、無宗教の人間である。しいて云うならば、やんわりとした仏教、やんわりとしたアニミズムといったところの典型的日本人である。やはり、アレルギーは深刻で、敬虔なクリスチャンのようにはなれない。毎朝仏壇にお経をあげるようにもならないだろう。よく「信じるものは救われる」というが、もし本当にそうならば、わたしは救われないだろう。しかし、信仰とまでもいなくても、何か心のよりどころになる存在は必要なのではないかと思う。

昔から電車の旅が好きで、日本全国を鈍行列車で回ったが、至る所でその街のシンボルとして、トータルとして存在している山があった。桜島、会津磐梯山、富士山、立山連峰…。その街のどこにいても

その山が見える。向こうからも見られている。山は何も語らないが、雄大に美しく、ただそこにそびえている。そんな風景自体が単純に羨ましかったし、現代を生きる人間に必要なのはこの存在なのではないだろうか、とさえ思った。「お天道様が見ている」というような感覚である。仰々しくもなく、ただそこにあるというだけで、人を勇気づけ、責し、励ますような存在。ふるさとに帰った時に、ただいま、と云えるような存在。それこそが信じるものを失った人々に力を与え、安らぎある生活のトリガーになるのではないだろうか。そんなことを考えながら、人の少なくなった電車のなかで、一人興奮していたを覚えている。



「碗」

130×80mm 2013年

器は生活の道具として、人の生活の食事という大切な場面に立ち会う事が出来る。

「そういえばこの湯呑み、もう何年使っているんだろう」

わたしは食器を制作する時、そういった存在を作りたいと心がけている。あの山々には到底勝てそうにないが、もっと個人的に人々の人生と共にある事ができるのではないだろうか。生活にとけ込み、人生のドラマとともにあり、ふとした時にその器で食事した風景を思い出し、誰かを思ったり。ちょっとしたころのよりどころになるような、ただ、そこにある存在。

器には、それができるのでは無いか、と思うのである。

(きむら ようじろう/陶作家)

繋がり - 日々感じること -

西村由布

距離間(感)とその視線

気難しい人、おしゃべりな人、せっかちな人、呑気な人(私)、...。人それぞれに距離間隔は違うが、本能的に誰もが心地よいと感じる距離間がある。人間関係、ビミョーな距離、あいまいな距離、複雑な距離。一人ひとり抱えている事情も様々。器と私との距離、隣り合った器と器との距離。ふと、制作中にそんなことを考える。上、下、縦、横、視線が違えば距離間も変わる。時間をかけさまざまな視線からその距離間を探る。

集合体の不思議

- トライポフォビア、(集合体恐怖症)。一つでは目立たないありふれたものでも、同じものが無数に集合すると、恐怖心や嫌悪感を覚えること。-

私もそれに近い感覚を、しばしば受けることがある。窯詰めの際、自ら制作した壺の穴や無数のシーサーの眼が、下からじっとこちらを凝視しているかのような錯覚を覚え、足がすくむ。しかし、恐怖心と相反して、何故か目を離すことができない集合体の存在感がある。ゾワゾワ。ゾワゾワ。なぜか引き付けられる。

最近 336 枚のタイルを作った。1枚1枚はどうということもないタイルだが、並べることで濃淡がグラデーションとなり、空間が一つの形にみえた。そこには一つでは表現出来ない集合体の美しさがある。集合体の目を離すことが出来ない存在感、美しさ、無数のものを並べることで生まれる何かが確かにあると感じる。

真っ暗しん

沖縄の言葉で真っ暗闇のことをいう。

真っ暗しんの世界、ヤンバルの森の奥深くで私はそれを体感した。

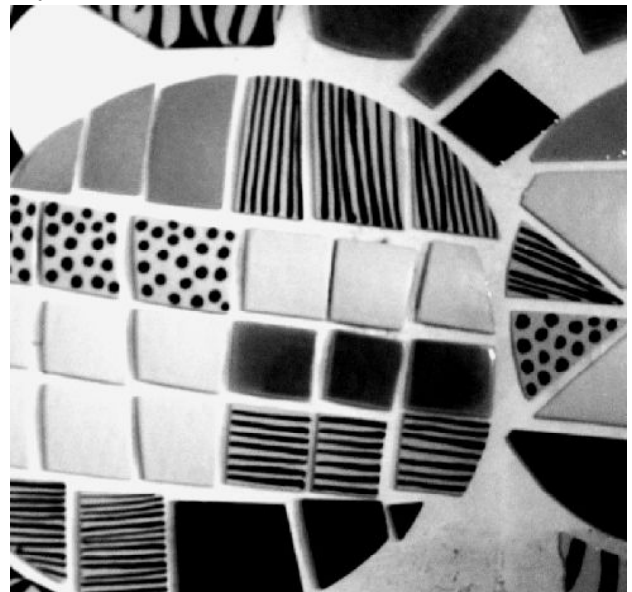
車で国道58号線を北に走らせ、沖縄本島の北部、ヤンバルの森を目指す。

日常の喧騒から離れ、北に進むにつれて次第に森がうっそうと生い茂り、生き物の気配が濃くなっていく。亜熱帯の森の奥深くへと続く林道を走り、溪流河川沿いにテントをたてる。空気は澄み、新鮮な森の香りが肺を満たしてくれる。リュウキュウハグロトンボが飛び交い、テナガエビやヨシノボリが気持ちよさそうに遊泳している。

夜更けになると、昼間とは別世界に、一変する。月明かりも届かない深い森、闇と自分の身体が溶け込み、一体になったかと思うほどの深い闇。一瞬、平衡感覚を忘れてしまう。ゾワゾワと皮膚感覚が鋭くなり、恐怖心すら覚える。時折、どこからか「コ

ホウー、コホウー」とリュウキュウコノハズクや「キョキョキョキョキョ」とけたたましいヤンバルクイナの鳴き声が、闇を切り裂く様に響き渡る。暗闇があらゆる感覚を研ぎ澄まし、カエルや虫達の鳴き声、水の流れる音も驚くほど大きく聞こえる。

そんな真っ暗しんの中、上空には見渡す限り星が広がり、足元を見ると、ホテルのように淡い光を放つ何かがある、そこかしこに無数に広がっている。暗闇の中、感覚だけを頼りにその光を恐る恐る手に取る。無数の光の正体は、光るキノコの菌糸が落葉についたもの。昼間は何の変哲もないただの落ち葉が、真っ暗しんの世界に無数の光を放つ。上も下も光で埋め尽くされ、まるで宇宙に放り込まれたような感覚。幻想的で恐怖心などどこかに吹き飛ばしてしまい、私もこの自然界の一部なんだと体感し、繋がりをを感じる。



「カケラでコラージュより」

2013年

日々の生活で感じること、経験することは、全て私を形成するカケラとなる。記憶の中に蓄積した恐怖心もまたその一部だ。日々の制作もまた繋がりの連続で、隣同士がつながり合っている。今日の発見や失敗も明日に繋がるカケラとなり、私の作品に繋がる。土をこね、土の塊から形を掘り出す、そこから生まれるカケラ。カケラを繋ぎ合わせることで、作品が生まれる。カケラでコラージュ。

(にしむら ゆう/陶作家)

<作家プロフィール>

■ 紺野乃美子（このの のぶこ）

1983年大阪府堺市生まれ
2006年沖縄県立芸術大学 工芸専攻 陶芸コース卒業
2007年同大学 陶磁器研究科終了 [土の實ファーム]の築窯に参加、同窯にて窯業に従事

個展

2010年新世代の陶[紺野乃美子展]=土と火と私= /画廊 沖縄

グループ展

2004年 KYO-RYU ART PROJECT/那覇市
2009年[沖縄クリエーション展]/阪急梅田店(大阪)
2011年こねり手のかたち展/桃林堂画廊・青山店(東京)
2011年こねりーず展/画廊沖縄
2012年4月 宮里志織・紺野乃美子展 Gally Petituluxe / 東京銀座
2013年5月 紺野乃美子・高橋里子展 Gally Petituluxe / 東京銀座
2013年11月第2回こねりーず展/画廊沖縄

■ 木村容二郎（きむら ようじろう）

1983年大阪府豊能町生まれ
2006年沖縄県立芸術大学 工芸専攻 陶芸コース卒業
2008年同大学陶磁器専修 修了
同年より読谷山焼窯 大嶺実清氏に師事。
2013年那覇市安里に工房を構え独立する。

グループ展

2013年8月「手の掌」(青山桃林堂ギャラリー)
2013年11月第2回こねりーず展/画廊沖縄

■ 西村由布（にしむら ゆう）

1983年沖縄県南風原町生まれ
2006年沖縄県立芸術大学 工芸専攻 陶芸コース卒業
2008年京都市伝統産業技術者研修陶磁器コース専修科修了
2008年8月沖縄に工房を構える

個展

2010年 新世代の陶「上原由布展」=ライン=/画廊沖縄

グループ展

2005年「みなも」/カフェ・hal(沖縄)「夏のうつわ展」
/うつわ菜の花(神奈川)
2008年「陶展」/second house(京都)
2009年「沖縄クリエーション展」/阪急梅田本店(大阪)
2011年3月こねり手のかたち/桃林堂画廊・青山店(東京)
2011年7月こねりーず展/画廊沖縄
2012年2月沖縄の新しいカタチIV/White Gellery(鹿児島)
2013年11月第2回こねりーず展/画廊沖縄

KONERI-ZU

こねりーずについて

4年半前、新世代の陶作家たち5人で始まった展示会開催へ向けてのトークセッション。2010年3月の「新世代の陶」展（作家4人によるリレー個展）を経て、いつの間にか仲間内で「こねりーず」というグループ名を名乗って活動を続けていた。それぞれの作風は若手らしい新鮮な感性とパワフルな越境があり、強烈な個性を放ち来廊した方々に大きなインパクトを与えた。今回は2年ぶりの「こねりーず展」となった。

しかしながら、結婚して生活のスタイルが変わり、土とロクロに向うことが出来ない生活環境であったり、持続的に制作活動が出来ない状況になったり、30才前後の作家活動は「生活」と「継続」、「時代」と「新たな展開」をキーワードに、乗り越えなければならない様々な事が待ち受けている。その一方で、3年半前の「新世代の陶」展に諸般の事情で出品参加を断念せざるを得なかった木村容二郎氏が今回加わる事になった。木村の作品は芸大の卒展を見た時から、気になっていた作家の一人であった。映画『武士の一分』に見られる、普通の人々のつましい暮らしにある「品格」と「存在」に通底する印象を彼の作品から感じていた。大嶺実清氏の工房で5年の修行を経て、今春独立し自前の工房を那覇市内に構えた。過日訪ねた時は一階の工房に大きな窯が据えられ、中央にロクロ、作業道具などが所狭しと整理整頓され、その本気度が強い印象として残った。

今展の第2回こねりーず展は紺野乃美子、木村容二郎、西村由布の3人によるグループ展となった。可愛い動物たちの魅力的な陶造形で人々を魅了した前田彩氏、タタラの技法で陶芸の枠を飛び越え刺激的な造形作品を提示した宮里志織氏が休む事になった。次回を楽しみにしたい。

ともあれ、土をこね、形を整え、窯に入れ、全てを炎にゆだねる仕事を共有する作家たち。社会のシステムがアナログからデジタルに変換された時代の中で育った世代である。生活のスタイルも生活空間も大きく変化した。若手作家たちの「土と炎」に向き合う仕事が、既成の枠を越え、新たな地平を展開し、未知の世界と遭遇することに期待したい。(画廊主/上原誠勇)

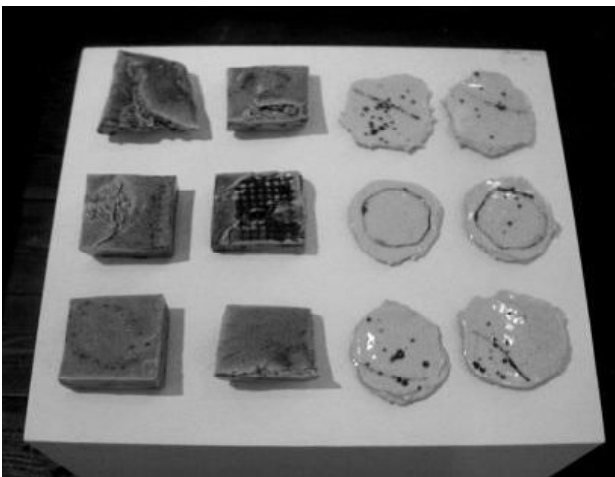
<展示参考展示作品>



紺野作品



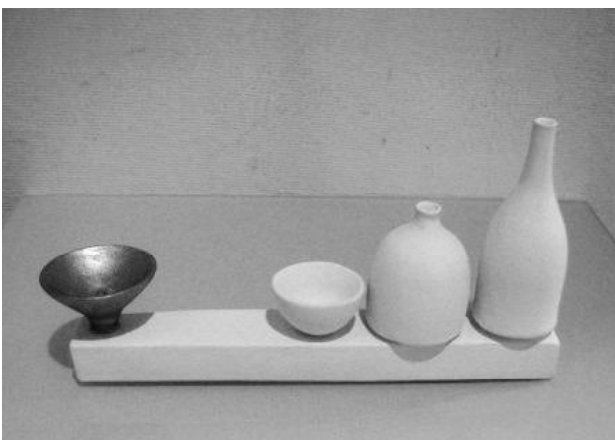
紺野作品



木村作品



木村作品



西村作品



西村作品